

Title	間崎万里教授を悼む
Sub Title	Necrology : Professor Masato Masaki
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.3 (1964. 11) ,p.1(243)- 4(246)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19641100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

間崎万里教授を悼む

松本信廣

間崎さんは三田史学会が生れた時、丁度塾の史学科の学生であつた。その意味で先生は三田史学会の創設者の一人であり、三田史学科の生みの親が田中萃一郎さんであつたが、史学科の卒業生として終始一貫、三田史学会の為尽された氏は、まことに吾々の史学会の育ての親と云える。

私が大正の初め普通部四年生で発火演習が東京の郊外に催された時、陣頭で指揮をとつていると、其時大学を出て普通部に新たに赴任してこられた同氏が、「君、前面にいるのはたゞ斥候隊だけだよ」と注意してくれたのが先生との初対面であり、なんでも口を出してだまつていられない親切な同氏の面目が躍如としている。この率直な一本調子な所が、時には人の誤解をまねいたことはあつたが、その他人に對しよく世話を焼き、かつ正直でまがつたことの嫌いな同氏の性格は人の信頼を拍し、ともすると銘々が孤立化し、統率のとれない塾風の中に史学科だけが比較的纏まりのある史学会を中心として目覚ましい躍進的發展を遂げたのは間崎君の人徳のしからしめた所といつてよく此点は何人も氏の功績を認めないわけにはいかない。

多才多芸の田中博士の衣鉢をつぎ、その近世政治史、西洋史、史学概論などの講義の伝統をつがれたが、欧洲に留学せられた時先ずパリーに在留せられたので、その考古学的、尚古的な氣風に感化せられ、帰朝後も塾に考

古学的研究を奨励され、自らも西洋古代史の講義をされた。しかしながら、得意なのは英國の歴史であり、英語の造詣は人の尊敬の的となつた。

先生は、自由主義の塾の学風の身についた人物であり、戦時中塾の校舎が麻布の連隊の宿舎に使用されていた當時など、兵卒をしかりつけている上官にくつてかゝつて問題を惹き起ししたりしたことは軍国主義華かだつた當時の一話柄であつたが同氏が魚の水を得た如く活動せられたのは戦後の混乱期であり、民主日本の再建に一翼をになわれたと云える。文学部長として新制大学の発足、通信教育の創設等に尽されたが、中でも率先して大学における男女混合教育を奨励され、女子の入学を多量に許したのも先生学部長時代の出来事であつた。

外に於ても文部省の教科書検定委員として活躍せられ、また日本学術會議が、我国歴史学の分裂に当惑し、その一本化を翹望した時、丸山、山本(達郎)、松島、和歌森等の諸君と共に日本歴史学協会の創設に大変尽力せられた功績は大なるものがあつた。間崎さんは此協会が出来上り、活動し始めた頃は、理事として骨折られたが、まもなく塾が当番校としてその運営を引受けた頃には病氣の為表面に立たれることは難かしくなり、私が代つてその役目を引受けことになつてしまつた。塾が今日でも日歴協の御世話をしている縁由は、全く同君の昔日の貢獻に端を発しているわけである。

日本西洋史学会が出来た際、先生も参画されたが、その際の副産物として早稲田大学の西洋史の教授達との話合いが最初の機縁となつて今日もつゞいている早慶史学会が誕生したわけである。野球でしのぎをけづつて、両大学ではあつたが毎年の学会の交互開催で意外に先生仲間に顔見知りが多くなり、友好関係が深められる好結果が生み出されたのも間崎さんの手柄の一つだと云つてよい。

三田史学会の機關誌『史学』も先生がながい間の発行署名人であつた。原稿の執筆が迅速で、人に返事を書く

のも、碁をやるものもぐづぐづするのが嫌いの性質であった。翻訳もなかなか達者でハンチントンの『気候と文明』の訳の如きは、多くの読者層に親しまれ、七百年週期説の西岡秀雄氏の如きも同氏の訳著から刺激を得たと云つてよい。慶応の先生は学校の都合でいろいろの講座をひき受けさせられるが、同氏も小山内通敏氏の後を受けて一時「地理学」を講じ、後に飯塚浩二君にバトンを譲られたのである。先生の地理学への関心が、今日塾内に幾人かの地理学担任の学者を培つたわけである。

口の悪い連中は、間崎さんの外に松本芳夫さん、及び私を含め、三田史学科の「三羽鳥」と云い囁いていた。

この「三羽鳥」も間崎氏を失つて一翼をそがれたわけであるが、同氏の育てた後輩が多士済々、三田史学の将来は心配することではなく、大盤石の上にあると云つてよい。三田史学会の歴史と共に終始せられた同氏の一生は、まことに吾々の追憶の歴史の上に深くきざみつけられ、忘るべくもない。集会の際にいつも侃々諤々の所信を披露せられた先生は、全く塾の名物男であり、しかもその筋はいつも正論で塾の大久保彦左衛門であつたと云える。人ざわりのよい、思つたことも口にださぬ所謂慶応型の人物の中にあつて間崎さんはまことに例外的な存在であり、かつて鳥居龍蔵博士が学究的な田中萃一郎氏を目して慶応らしからぬ学者と批評したが、田中さんの弟子としての間崎さんも塾では珍しい型の学者であり、その意味で又と得難い人材であつたと云える。秋風の身にしむ三田台上にあつて同氏を偲び、もう二度とお遇いすることが出来ぬと思うと淋しさの情胸に迫るものがある。塾監局の入口の左の草叢の中に苔むして一基のラテン文を記した小碑が立つてているが、之は同氏が一九〇九年普通部を卒業した時、同志を語らい、撰文を田中（萃）教授に頼んで建てたものと云われている。VIRIBUS UNITIS（力をあわせて）という標語は今後吾々の永久に忘れてはならぬ座右銘として記憶せらるべきものである。（参照・間崎万里、「三田山上のラテン語（三色旗四十四号）」）

間崎万里教授を悼む

間崎万里先生は明治二十一年六月七日高知県幡多郡西土佐村津野川五十一番地に生れ、大正三年三月慶應義塾大学文学科(史学科)を卒業後、同年四月慶應義塾普通部教員、同大学予科教員、文学部助教授を経て、昭和四年四月文学部教授に就任された。その間、大正十四年九月より三年間義塾留学生として英独仏伊の各国に留学、帰朝後は法学部にも出講された。

先生の研究は西洋古代史の考古学的研究から英國自治領民族主義の研究にわたる広範囲のもので、創成期の我が国西洋史学界に多大の貢献をされた。昭和二十年十一月「英國自治領民族国の成立」の研究によつて文学博士の学位を得られ、翌二十一年三月文学部長をはじめ慶應義塾評議員、塾史編纂所長等要職を歴任し、昭和三十七年七月に同大學名譽教授になられるまで研究と教育に尽瘁された。この頃より病を得て自宅で静養されていたが、昭和三十九年九月十五日脳軟化症に肺炎を併発して慶應病院において七十六年の生涯を閉じられた。

なお、先生の数多い著書、論文、翻訳、論評、紹介等主要著作目録は『史学』第三十五卷第二・三号、間崎万里先生頌寿記念号、の巻末に掲載されている。(神山記)